

【暗証聖句】「もしお前が正しいのなら、顔を上げられるはずではないか。正しくないなら、罪は戸口で待ち伏せており、お前を求める。お前はそれを支配せねばならない。」創世記 4 章 7 節

【日・カインとアベル】

創世記 4 : 1、2 「さて、アダムは妻エバを知った。彼女は身ごもってカインを産み、「わたしは主によって男子を得た」と言った。彼女はまたその弟アベルを産んだ。アベルは羊を飼う者となりカインは土を耕す者となった」カインが生まれたとき、「主によって男子を得た」とその喜びが語られていますが、弟のアベルが生まれたときは、ただ、「弟アベルを産んだ」とだけ語られています。この違いは、初めての子どもと 2 番目の子どもの違いというのではなく、実は、カインのことを主が約束してくださった救い主だと期待していたことを示しているようです。各時代の希望上 P21 には、次のように解説されています。

「救い主の来臨はエデンで予告された。アダムとエバが初めてこの約束を聞いたとき、彼らはそれがすぐに成就されるものと期待した。彼らは最初に生まれた息子を喜んで歓迎し、その子が救い主であるように望んだ」ちなみに、カインという名前は、「獲得すること」を意味し、何か貴重なもの、力あるものの獲得することを表しているのに対して、アベルは「蒸気・息」を表す言葉で、空しいと訳さることが多い言葉です。しかし、そのカインがアベルを殺すことになるのです。そのときのアダムとエバのショックは計り知れません。

【月・二つの献げ物】

創世記 4 : 3~5 「時を経て、カインは土の実りを主のもとに献げ物として持って来た。アベルは羊の群れの中から肥えた初子を持って来た。主はアベルとその献げ物に目を留められたが、カインとその献げ物には目を留められなかった。カインは激しく怒って顔を伏せた」

アベルは羊を飼う者となり、カインは土を耕す者となりました。そして、「時を経て」、二人の兄弟は一緒に神様へのささげものをもってやってくる場面が聖書に出てきます。どれくらいの時を経ていたのかわかりませんが、主へささげものをささげるのは初めてではなかったことでしょう。何をささげなければならないのかもよくわかっていました。最も大切なささげものとは、イエス様の十字架の死を象徴する羊の初子でした。そこでその羊が血を流すことが重要でした。地の初穂については、神様への感謝を表すもので、犠牲の動物と合わせてささげなければなりません。ところが、このときカインは犠牲の動物は携えず、土の実りだけを献げ物として持って来たのでした。カインは自分の力、額に汗して得た自分の努力の結果を神様にささげて、神様に褒めてもらいたかったのかもしれませんが、しかし、主はアベルとその献げ物に目を留められましたが、カインに対しては、その献げ物だけでなく、カイン自身にも目を留められなかったのでした。カインはどれほど傷ついたことでしょうか。人間的に考えれば、カインのささげものに対して、「よくがんばった。でもこれは私が求めているものではないぞ」と、ほんの少しでもその努力に報いる言葉があっても良さそうに思うかもしれませんが、しかし、神様は、私たちが冷酷に感じてしまうほど徹底した態度でカインに臨んだのでした。それは人間の努力で救いは絶対に得ることができないことを教えるためでした。ほんのわずかでも私たちが救いのためになすべき業はないのです。神様は何も私たちに要求しておられないのです。

例話・小学生の勝手な宿題、ホテルの支払い

【火・犯罪】

人類初の殺人事件は、何とアダムとエバの二人の息子たちの間で起こりました。どのようにしたら人が死んでしまうのか、わかっていなかったのかもしれませんが、また大切な弟を殺してしまうということがどういうことか、わかっていなかったのかもしれませんが、しかし、主がアベルだけを顧みてくださったとき、瞬間的に抑えがたい怒りの感情が湧き上がったのです。その瞬間的に湧き上がった怒りの感情は、罪の結果そのものであり、「罪は戸口で待ち伏せており、お前を求める。お前はそれを支配せねばならない」（創世記 4 : 7）にあるように、その怒りの感情をコントロールしなければなりません。しかし、できませんでした。

「お前はそれ（罪）を支配せねばならない」という言葉は、さらに深い意味があるように思います。カインのささげものは、自分の力で救いを得ようとすることを象徴していました。そうならば、あらゆる罪を自分の力で支配しなければならなくなります。そのことを語っているのです。しかし、自分の罪をすべて支配できるものなどありません。だから、代わりに羊が象徴している罪のないお方が罪を犯すことなく、しかし私たちの罪の罰を受けて死んでくださったのです。そのことを思うとき、私たちにただ主の憐みにすがり、感謝を表す以外にはないことを思わされるのです。主は私たちの主に対する感謝の心を待っておられます。

【水・カインに対する罰】

主はカインに、「お前の弟アベルは、どこにいるのか」（創世記 4 章 9 節）と尋ねられます。アダムとエバが罪を犯し隠れたとき、主が「あなたはどこにいるのか」と尋ねられたのと似ています。もちろん、主は彼らがどこに

いるのか知っておられます。この問いかけは、罪に向き合わせるためのものです。これに対して、アダムはエバに責任転嫁したとはいえ、罪を犯したことを認めたのですが、カインは、「知りません。わたしは弟の番人でしょうか」と嘘をつき、自分の犯した罪を認めませんでした。そして、神様に公然と逆らうのでした。この結果、どうなったでしょうか。まず、「お前は呪われる者となった」（創世記4:11）と、カインは神様から呪われる者となったとの宣告を受けます。アダムのときはアダム自身ではなく、土が呪われたのですが、カインの場合は「土よりもなお、呪われる」と、カイン自身が呪われたのでした。そして、「土を耕しても、土はもはやお前のために作物を産み出すことはない」と、土を耕す人だったカインは、その土を耕すことがもはやできなくなってしまい、その結果、住み慣れた地から追放され、地上をさまよい、さすらう者となったのでした。カインは「わたしが御顔から隠されて、地上をさまよい、さすらう者となる」というのは、重すぎて負いきれないと言います。神様の御顔の前を生きるというのが、私たちにとって最も大切なことであり、安心して生きていける秘訣です。ところが、カインはその神様の御顔から隠されて生きなければならなくなってしまったのです。それはまさに人生をさ迷う人となることを意味していました。不安と恐れに満ちた人生の始まりでした。これが罪の結果なのです。また、御顔から隠されてと言っていますが、神様が御顔を隠されるのではなく、カイン自身が自ら神様の御顔から隠れるように生きるようになるのです。罪を認めず、赦されることがないままであるなら、神様に対して頭を上げることなどできないからです。

【木・人の邪悪さ】

カインは主の前を去り、エデンの東、ノド（さすらい）の地に住みます（創世記4章16節）。そして、そこに町を作り、子孫が増えていきます。5代目のレメクは、二人の妻をめとり（4:19）、「わたしは傷の報いに男を殺し、打ち傷の報いに若者を殺す。カインのための復讐が七倍ならレメクのためには七十七倍」（4:23、24）と豪語するなど、非常に暴力的で、罪を罪とも思わないようになっていきます。罪の結果が、このような形で子孫にまで及んでいったのがわかります。このような中で、アベルの死後、新たに生まれたセトにも子供が生まれていきます。創世記4章26節を見ると、「セトにも男の子が生まれた。彼はその子をエノシュと名付けた。主の御名を呼び始めたのは、この時代のことである」とあります。カインの子孫たちの罪がどんどん広がっていくのを見て、セトの子孫たちが主の御名を呼び始めたのかもしれませんが。このセトの子孫から、死を経験せず天にあげられたエノクや大洪水の際に残されたノアなどが生まれます。ただ、大洪水のときにはセトの子孫も滅ぼされていったわけですから、罪の勢いをとどめることはできなかったということです。まるで感染病があつという間に広がっていったように、罪は広がっていったのです。